

## 鬼 娘 の 系 譜

黄表紙を中心に

### ONI MUSUME IN EDO POPULAR FICTION

Adam KABAT \*

In the summer of 1778, *oni musume* (literally, “demon-girl”) enjoyed a brief popularity as a sideshow attraction in an Edo religious festival. While records of the day attest to *oni musume*’s acclaim with the general public, descriptions of the “demon” itself seem rather bland. In fact, *oni musume* soon found herself with at least one competitor, a flashy “fake” incorporating all the typical characteristics of a demon.

*Kibyōshi* dealing with *oni musume* from that period are an interesting mixture of fact and fiction. The illustrations portray the woman probably much as she really was, while the stories reflect contemporary trends. At the same time, elements of *oni* folklore and literature are worked into the texts. These broader cultural aspects come to the fore in later *kibyōshi* in which both pictures and text place *oni musume* firmly within the context of the traditional *oni* stereotype. The jealous woman who changes into a demon establishes itself as one of the prevailing motifs in *oni musume* literature.

---

\* アダム・カバット ウェスレアン大学卒業。東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程博士課程満期退学。現在武蔵大学教授。近世・近代日本文学を専攻し、主な論文に「影の女——泉鏡花の美人たち」「化物尽の黄表紙の翻刻と考察（その一）（その二）」がある。

## はじめに

安永7年(1778)の6月1日から7月17日まで、鬼娘と呼ばれた見世物が江戸の東両国広小路で流行っていた。これは、本所回向院で行なった信州善光寺如来開帳の際の興行であった。この開帳に因んだ様々な興行の中でも、とりわけ鬼娘が人気を得て、両国橋の反対側に贋物が現れたほどであった。また、鬼娘が生み出した文芸作品は当時から数多くあり、実際の鬼娘がとうに姿を消した後も、文芸作品の中の人物として長く生き続けてきたのである。本論では事実としての鬼娘を明らかにしながら、文芸作品における変容を辿ってみる。

## 鬼娘の事実

私が「鬼娘」を初めて知ったのは、『今昔化物親玉』(伊庭可笑作、鳥居清長画)<sup>①</sup>といういわゆる典型的な化物尽の黄表紙の中であった。この黄表紙の大まかな筋は、化物夫婦に不思議にも人間の子供が生まれるが、化物世界においては人間の子供は珍しいものであり、結局この子が六歳になると、両国広小路で見世物にされてしまうのである。出産の場面では、周りの化物たちがこの人間の子供をじろじろ見つめるが、山姥の取り上げ婆は「近い頃、人間の子に鬼娘もござりました」(一丁ウー二丁オ)と言い返すのである。この黄表紙の刊行年は定かではないが、安永8年ないし9年と推定できるので、これは、もちろん安永7年に流行っていた鬼娘のことを暗示している。そして、作者の言わんとしていることは、化物世界で人間の子供が生まれるのと同じくらい珍しいこととして、人間の世界では鬼娘が生まれた。つまりここでは、人間の子としての鬼娘と化物の一般的なイメージが何らかの形で結びつけられているのである。

しかし、この問題に触れる前に、まず実際の鬼娘像を見てみよう。その当時の日記や随筆を検討する。大田南畝の『半日閑話』では「善光寺如来開帳 今(6/1)筆者加筆」より両国回向院に於て信州善光寺如来開帳、一国の人狂せしが如く、参詣群参おびたゞし。夜深更より高提灯を燃し連れて参るもの大念

仏を唱ふ。後公より禁ず。両国広小路見世物に鬼娘出る。大に評判あり。橋向ふにも又似而非物出来て、是又はやる。鬼娘伝出る」となっている<sup>②</sup>。柳沢信鴻の『宴遊日記』では「橋東に伯州より来し鬼娘の見せ物、贋物の千年土龍、牛の身に六字名号の斑文を作りし見せ物、橋西に贋物の鬼娘其外輕業等数多在、太平飾物の板行を買ふ」<sup>③</sup>と書いてある。両方の随筆では贋物の鬼娘についてのコメントがあるが、『宴遊日記』では本物の鬼娘は橋の東の方で、贋物は西の方となっている<sup>④</sup>。さらに鬼娘の出身地は伯州というような指摘が、いかにも鬼娘が人間から生まれた子供であることを仄めかしている。鈴木白藤の『鳩溪遺事』では「鬼娘とて鬼の様な娘を看物場に出す」（傍点筆者）<sup>⑤</sup>となっており、やはり鬼娘が人間に近い存在だと理解できる。『鳩溪遺事』や齊藤幸成の『武江年表』では、「飛んだ靈宝」という仏菩薩の形となっている細工の見世物が同時にあったことが述べられている。

同日より、閏七月十七日迄、回向院にて、信州善光寺弥陀如来開帳、此時、開帳繁昌して詣人群をなす、暁七時頃より棹の先に挑灯多くともしつれて、高声に念仏を唱へて参詣するもの多し、平賀鳩溪、鳥亭焉馬が求によりて工夫をなし、小き黒牛の背に、六字の名号をあらはし、見せものに出して利を得たりといふ、又鯉江源三郎、古沢甚平といふもの、細工にて飛んだ美宝と号し、あらぬ物を見立て、仏菩薩などの形に作りたる見せもの、鬼娘といへる見せものなど、いづれも見物多く賑ひしとぞ（『武江年表』巻の六）<sup>⑥</sup>

さらに大田南畝の『俗耳鼓吹』では鬼娘に因む川柳、「きぬをめぐりの鬼のみせもの」<sup>⑦</sup>がある。おそらくこれは、自分の顔を被り物で隠している鬼娘が被り物を取って、顔を客に見せることを意味していると思われる。

こういう文献を見て分かるように、随筆や日記では鬼娘に関してさほど詳しいことは書いていないが、とりあえず両国広小路の数多くの見世物のなかで、

鬼娘が特別な人気を集めたことは十分想像できよう。

### 初期の黄表紙における鬼娘像

次に文芸作品における鬼娘像を辿ってみたい。鬼娘の見世物と同じく安永7年ないし8年に刊行された作品は次のとおりである。

#### 黄表紙

『鬼の趣向草』（安永7年刊）国立国会図書館蔵

『古々路の鬼』（蓬萊山人亀遊作、安永7年刊？）国立国会図書館蔵

『はつゑがほ』（安永7年刊？）東京都立中央図書館蔵

#### 滑稽本・洒落本

『鬼娘伝』<sup>きちやうでん</sup>（夢鬼山人作、安永7年7月刊）

『鬼神論評判娘』（安永7年7月刊）東京都立中央図書館蔵

『女鬼産』<sup>おきみやげ</sup>（安永8年刊）（『洒落本大成』第八卷、昭和55年、中央公論社）

#### 小咄

『寿々葉羅井』（志文作、北川豊章画、安永8年刊）（『続帝国文庫落語全集』）

滑稽本の『鬼娘伝』<sup>きちやうでん</sup>や『鬼神論評判娘』が安永7年7月に刊行されたことが、原本を見るとわかる。6月1日の『半日閑話』の項目で「鬼娘伝出る」と書いてある。いずれにしても、本物の鬼娘の見世物と時期的に近いことは間違いなく、こういう作品が宣伝の役割を果たしたのは、言うまでもない。

『古々路の鬼』と『鬼の趣向草』という2点の黄表紙の刊行の月のはっきりとは断定できないが、いずれもいわゆる際物である。つまり、当時の情報を伝えるため、または宣伝のために書かれたものと思われる。もちろん、フィクションの様相が全くないわけではない。フィクションの部分と実際の鬼娘に基づいて書いた部分を切り離して考察してみる。まず、両方の黄表紙のストーリーを簡単にまとめてみる。



### 〈『古々路の鬼』の梗概〉

主人公のおきめは美しい娘である。父親の庄治左衛門はお金に困ったので、家宝の景清の琵琶を抵当にして、金村という男からお金を借りる。ところが、庄治左衛門は借金が返せず、おまけに大事な琵琶も盗まれたために、金村はその代わりに、おきめをもらうと言ひ出し、むりやりに連れていく。逆上した庄治左衛門は金村の頭を砂利に擦りつけ、口に杭を入れて殺す（図1）。怨霊になった金村はおきめに呪いをかけ、おきめの容貌がしだいに鬼娘に変わる。完全に鬼娘になったおきめはお寺で祈願するが、そこにいる若い出家に一目惚れする。出家がおきめから逃げると、おきめは追いかけて、湯島天神まで来る（図2）。結局おきめが寺の鐘に入り、成仏するところで話が収まる。

### 〈『鬼の趣向草』の梗概〉

鬼女の退治を頼まれた維茂は、無事に戸隠山の鬼を退治する。鬼女は地獄に落ちるが、最近善光寺如来の利益のせいで、地獄に落ちている人間がだいぶ減っている。地獄は大変な不景気で、閻魔王をはじめ、鬼たちが皆暇を持てあましている（図3）。娑婆に返された鬼娘は、善光寺如来の邪魔をしようとする。提灯を持っている参詣者の長い列を見つけたり、お腹がすいて、真桑瓜を盗んで食べる（図4）。そして鬼娘は「飛んだ霊宝」という幟を見つけ、これを善光寺の開帳と勘違いして、中に入って壊す（図5）。鬼娘の噂が江戸中に広がり、江戸の庶民たちが節分気分を外に豆を蒔く。鬼娘は参詣者の後をつけ、やっと本物の開帳を見つめるが、如来の仏力によって改心する。そして最後に鬼娘は、見せしめのために見世物にされるはめになる（図6）。

さらに『<sup>きちやうでん</sup>鬼娘伝』の内容を簡単に要約する。伯耆出身の娘、お松は大変淫らな女で、色々な男と関係を持って、妊娠し、自殺して、地獄に落ちる。しかし閻魔王は、こういう淫らな女はたくさんの鬼たちを誘惑するおそれがあるから

図1 『古々路の鬼』 国立国会図書館蔵

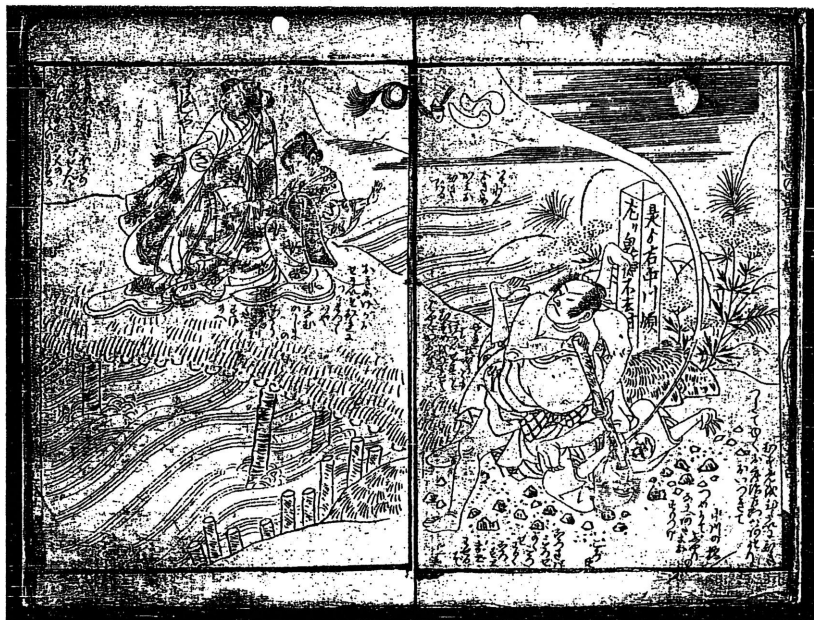


図2 『古々路の鬼』 国立国会図書館蔵



図3 『鬼の趣向草』 国立国会図書館蔵



図4 『鬼の趣向草』 国立国会図書館蔵



図5 『鬼の趣向草』 国立国会図書館蔵

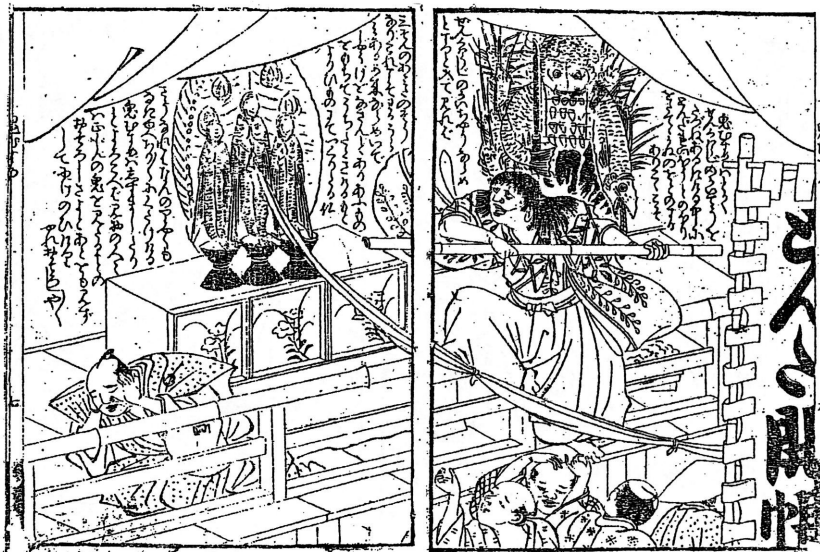


図6 『鬼の趣向草』 国立国会図書館蔵



と、娑婆に帰す。お松のお腹にいる子供の父親は、実は鬼だと閻魔王が教えてくれる。案の定、お松はれっきとした鬼娘を生む。そして最後に、金儲けと本人の「罪障消滅」のために、つまり「欲と恩愛」のために、鬼娘を両国広小路の見世物に出す。

さて、これらの文芸作品のなかには、随筆の記述と重なっている部分がどれだけあるのか。あるいは、互いに共通している部分が、どのへんにあるのか。

まず、随筆の記述と共通している部分を挙げる。

- 1) 鬼娘の出身地。「つゝしんで鬼娘が濫觴を尋るに。天からも降らず。地からも湧ず吾日本伯耆国大千山の麓風流の郡。多佐江村。太次衛門が娘お松といふ者あり」(『鬼娘伝』)。「伯耆国鬼娘と云のほりをだせばすはめづらしき見せものと初日よりのにぎはい江戸中の評判娘とはなりけり」(『鬼神論評判娘』)。この両作に出てくる「伯耆」は『宴遊日記』の「橋東に伯州より来し鬼娘の見世物」と一致している<sup>⑧</sup>。
- 2) 「飛んだ霊宝」の見世物。それぞれの干物で出来たこの細工の見世物は、『鬼娘伝』にも『鬼の趣向草』にも出てくる。『鬼の趣向草』の場合、鬼娘がこれを壊す場面が次のように記される。

鬼娘はとかく善光寺の開帳を訊ね歩きける中に飛んだ霊宝と幟を立てゝ、鐘の音のするあり、こゝこそ善光寺の開帳ならめとずつと入て見れば、三尊の阿弥陀の像なり。これこそ我が恨みある如来ならめいで、しやうげをなさんと、有り合ふ物を持ちて、打ち叩きける。もとより干物にて作りたる仏。さうなれば、なんの利益もなきゆへ、ちりへに碎けける。鬼娘はしすましたりと喜べば、見物の人々は正真の鬼を見たることの恐ろしさよとあとをも見ずして逃げのひけり(『鬼の趣向草』七丁オー七丁ウ)

これに当たる図5の中で、幟に「飛んだ霊宝」ではなく、「とんだ開帳」

と書いてあるのは、絵師の勘違いだろうが、魚や貝などを組み合わせて、仏像の形を作った細工の絵そのものは実際の「飛んだ靈宝」に近いと思われる<sup>⑨</sup>。また、『鬼娘伝』の中で、「とんだ靈宝に<sup>なまぐさ</sup>腥 坊主の謂れを知り」という。安永8年に「どふてつにとんだれいほう秤あり」（評万句合八・13）という川柳もある。

- 3) 被り物で顔を隠している鬼娘像。これはひとつの定着したイメージであると十分考えられる。『古々路の鬼』で顔を隠しているおきめは「まづその被りものを取るがよい。鬼娘のよふだ」と言われる。『古々路の鬼』にしても、『鬼の趣向草』にしても、それぞれの絵（図2・6・7参照）がこの被り物の姿を強調しており、鬼娘が被り物をしていたことが事実であることを語っているように思われる。

また、随筆の中では全く触れていないにもかかわらず、事実の鬼娘にきわめて近いと推定できるのが、黄表紙に描かれた鬼娘の外見で、『鬼の趣向草』の鬼娘の絵と『古々路の鬼』の鬼娘の絵が非常に似ており、いずれも、我々が抱

図7 『鬼の趣向草』 国立国会図書館蔵



いている典型的な鬼像とはかけ離れている。

鬼娘の容貌に関しての文はどれも彼女の口の描写を強調している。『鬼娘伝』では鬼娘の誕生の場面が次のように書いてある。「正氣付安へと。産落せしは。玉の様なる鬼娘。も、んぐわあへと。初声高く上にけり。夢の告に違わず。頭に痰瘤ほどな角が生。目に光ありて三角也。口は耳の脇まで裂て大なること三才斗りの小児の如く生れ出ると駆歩行すさまじきこといふ斗なく」。『鬼の趣向草』では口上のセリフとして、「口は耳の根まで裂けましたが、親の慈悲にて縫ひ縮めました跡がござります。歯は乱杭歯<sup>らんぐいば</sup>でござります。袋角と申て角の形もござります」という描写がある。いずれも、鬼娘の口が大きいことを強調しているのである。『鬼の趣向草』のストーリーの中では維茂伝説の鬼女であるはずなのに、なぜ「親の慈悲」という言葉が出てくるのだろうか。やはり、この場面だけが本物の見世物の口上の言葉を借りており、鬼娘が伯耆出身の人間から生れた鬼ということを仄めかしているのである。

また『鬼の趣向草』と『古々路の鬼』の両方には、鬼娘の歯が乱杭歯となっている描写がある。絵を見ても、その特徴がはっきりしている。『古々路の鬼』（図1）では、おきめの父親が金村を乱暴に杭で殺すので、金村の亡霊がおきめの歯を乱杭歯に変えさせるというような工夫が見られる。

さて、こうして鬼娘の容貌がいわば典型的な鬼と離れても、それぞれの黄表紙や滑稽本の中では描写が共通しており、さらにリアルに描かれている。鬼娘の見世物は、ほかの見世物がしばしばやったように何かの芸を見せたというような記述は全く見当たらない。要するに、鬼娘は自分の顔を見せただけで、容貌が最大の見世物だったと思われる。

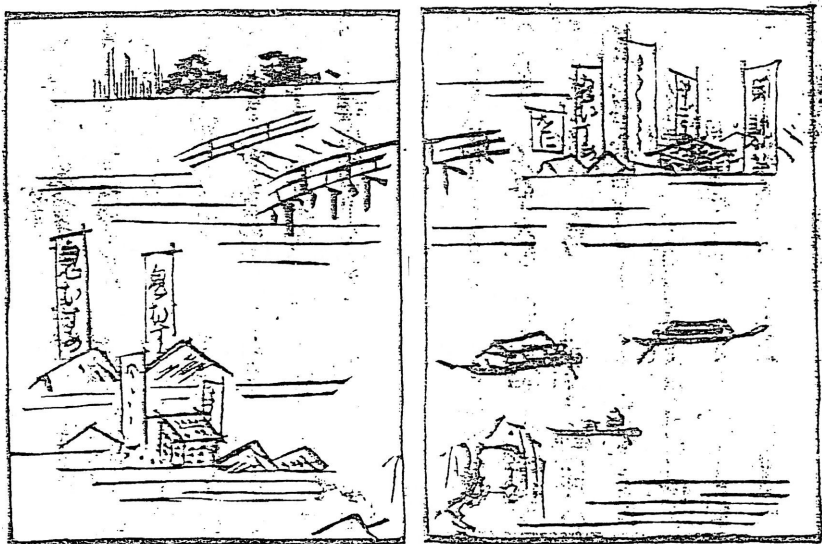
随筆の中では「贗物の鬼娘」が現れてきたことが書いてあるが、細かい描写が『鬼娘伝』の中に見られる。

いやへこんな珍しい物を。捨るもどふやらおいしい物。幸江戸に善光寺如来の御開帳。両国へ見世物に出したらば一廉の銭もふけ。一つは罪障消

滅の為にもと。欲と恩愛。身の上の憂に引れて。善光寺参り鬼の目にも阿弥陀。ねらい済した大当鬼娘が御評判へ極楽へ両国からの船廻し地獄は隙で鬼は見世物孔子は飴を見て老を養ん事を思ひ。盗跖は鎖を明ん事を思ふ。弘慶子は壺に入れることを工夫し。坤乾羅続は枯木の枝の危事を謡ふ。夫相応の思付有。両国鬼娘は須臾に化して。贗鬼の多くなりしは。時ならぬ節分の豆に追はれし故也其作。実の鬼娘に■少し。なめし革を以て面の皮を張り。一とせ流行し藝の目玉を用ひ。蠟石の歯を尖らす。握拳を喰はせて小き角を生したり。見る人毎に真偽を分兼る。其細工奇也といふべし。夢鬼山人。真の鬼娘が伝作れり。是も亦空言也然れ共南瓜は唐茄の甘に如ず。悪を懲し善を勧るの文意少く有。鬼娘も真偽ともに怪し。其伝も又怪し誠に鬼の名。空しからずと云両怪力乱人正月の二ツ有年二度目の七月書す（『鬼娘伝』）

「両国鬼娘は須臾に化して。贗鬼の多くなりし」という文は、贗物が一つではなく、複数であることを意味しているように思われる。『鬼神論評判娘』の

図8 『鬼神論評判娘』 東京都立中央図書館蔵





挿絵(図8)にも、「鬼娘」と書いてある幟がたくさん立っているのである。

しかし、贋物の鬼娘は果たしてどういうものだろうか。『鬼娘伝』の描写によると、この贋物が色々な細工を使うことによって、鬼の典型に近い「人工的」な鬼娘となっている。つまり、「贋物の鬼娘」は単に本物の鬼娘を真似しているだけではなく、外見的に鬼らしいものを目指していた。そしてこれが「本物」の鬼娘とは違う特徴なのである。しかし、当時の黄表紙や滑稽本は、この贋物ではなく、外見が鬼らしくない「本物」の鬼娘にこだわる傾向が見られる。

『鬼の趣向草』の中で、鬼娘を恐れて、江戸人が節分の真似をしていたという場面がある。「かの娘を見たる者、一人言ふとなく、二人となく、鬼が出る」と言ふこと、江戸中評判広りて、これをよけんとて五月晦日の夜を大年と定めて、門に松を立て、豆を蒔くこと節分のことし、江戸中残らず、豆を蒔きしゆへ、豆屋のやうになりたる」『鬼の趣向草』(八丁オ)。これと似ている話が、噺本体裁の黄表紙『はつゑがほ』にもある。「両国へ鬼娘が出て、江戸中の評判広がりて、これをよけんとて、五月晦日を大年と定め、豆を蒔くこと節分のごとく。さつへと蒔ひている所へ田舎者来り、『おまへではいま豆をかしやりますか』、『エ、こんたしゅうのほうでも蒔かしつたか』、『アイわしどものほうではとふに蒔きました。茄子と一ツ所に』」『はつゑがほ』(三丁オ)。この二つの文章をよく比較してみると、ほとんど同じだと分かる。『はつゑがほ』では、田舎者がこの季節外れの節分の風景を見て、びっくりするというような新しい工夫が見られる。『鬼娘伝』にも「時ならぬ節分の豆」が書かれており、鬼娘の流行に従い、このような風俗が実際行なわれたのではないかと容易に想像できよう。

もうひとつの共通するテーマは、善光寺の開帳の利益によって地獄が不景気になっている話である。『鬼の趣向草』(図3)の中で、罪人が少ないせいで、地獄が暇となっているが、全く同じ設定が、『鬼神論評判娘』・『女鬼産』・『はつゑがほ』にも見られる。『鬼神論評判娘』では「扱も善光寺の御開帳日にしてのにぎはひにかの御印文の御利生尊く罪あるもつまなきも現世未来をす

くひ給へば皆極楽のお客とて地ごくに行べき人なくして」となっており、『女鬼産』では「善悪の差別もなく安売に仏にせらるゝ故地ごくはこんきうにおよぶ」となっている。『鬼神論評判娘』や『はつゑがほ』の場合、お金に困っている鬼が、自分の娘を両国に出し、お金を稼ぐという共通している筋がある。「善光寺の御開帳にて諸人帰依して、地獄はなはだ飢饉。鬼ども、赤き鬼が青くなるとき、ひとりの鬼が、『コウはや地獄もつまつては、どふもならぬ』といふと、わきから年寄の鬼が、『こふあろふと思つて、わしもひとりの娘を両国出したて』」『はつゑがほ』（一丁ウ）。いずれも、善光寺如来開帳の事実をあてこんだ話だと考えてもさしつかえがなかろう。

当時の黄表紙や滑稽本は、一種のフィクションとして、一貫したストーリーがあるにもかかわらず、事実の鬼娘の様相を伝えようというジャーナリスティックな面がある。しかし、後期の鬼娘像はどうなっていくのだろうか。

### 後期の黄表紙における鬼娘像

鬼娘が登場する後期の黄表紙として次のような作品が挙げられる。

『桃太郎一代記』（北尾政美画、天明元年刊）東京都立中央図書館蔵

『本能見世物』（芝全交作、式上停柳郊画、寛政2年刊）東京都立中央図書館蔵

『怪席料理献立』（望月窓秋輔作、寛政8年刊）国立国会図書館蔵

こはめずらしいみせものがたり  
『這奇の見勢物語』（山東京伝作、享和元年刊）東京都立中央図書館蔵

当然のことだが、時代が変わると、実際の見世物の鬼娘のリアルなイメージは薄くなるはずである。しかし、受け継いでいる部分もある。顔を被り物で隠している鬼娘のイメージは、12年後に書かれた『本能見世物』（図9）や18年後に書かれた『怪席料理献立』（図10）や23年後に書かれた『這奇の見勢物語』（図11）に見られる。

また、『鬼の趣向草』の中では、鬼娘が両国に迷い込んでいるうちに真桑瓜を盗んで、したたかに食べる場面がある（図4）。「こゝかしこ歩いて見あたり

図9 『本能見世物』 東京都立中央図書館蔵



図10 『怪席料理献立』 国立国会図書館蔵



図11

『這奇の見勢物語』 東京都立中央図書館蔵



たるを幸いと瓜、西瓜の店にかけいり、有り合真桑瓜を掴み取りてした、かに喰らいける。売り手も此有様を見るより駆け出て人々にかくと告げける。これを真桑瓜の鬼をするといふことをいいならはせり』『鬼の趣向草』（六丁オ）。18年後に書かれた『怪席料理献立』にも、真桑瓜は鬼娘の好物となっている（図12）。「委細を言、含め、進物として真桑瓜を贈る。これは鬼娘が好物ゆへなり。それゆへに今以て真桑瓜を客人へも出さぬ前に鬼をするといふ』『怪席料理献立』（三丁ウー四丁オ）。「鬼をする」とは元々「毒味をする」という意味があったが、江戸時代になると、瓜の上の部分を取ってそこから食べるという限定された意味に変わったらしい。「真桑瓜さん俵をハ鬼が食イ」（柳樽八35ウ）という川柳はこういう意味であろう<sup>⑩</sup>。真桑瓜なら、皮が薄いので、歯でも齧られるまた、真桑瓜そのものは非常に庶民的な果物だったらしい。つまり、真桑瓜に鬼をするとは、ガキがするような乱暴な食べ方を意味している。『鬼の趣向草』の絵ではまさに鬼娘がこういう食べ方で、真桑瓜を齧っているのが見られるが、鬼娘と真桑瓜とを結びつけた発想が、18年後の『怪席料理献立』にも使われるのは、意外なことである。

さて、後期の黄表紙における鬼娘のイメージは最初のものとどのように変わっていったのだろうか。被り物の中から顔を出しているという場面が同じであると言っても、『本能见世物』（図9）や『怪席料理献立』（図10）では本格的な鬼の容貌となっている。『本能见世物』では、鬼を自分の妻にした大森彦七は金儲けのため、妻を「鬼娘」の見世物にする。「先年善光寺の開帳で見せたやうな代物ではござらぬ。これこそ大極上無類とびきりの鬼娘正味六十五文でござる」（五丁オ）という文が示すように、これは明らかに善光寺の開帳の鬼娘のパロディーとなっている。

『怪席料理献立』では、鬼娘が、仲間の熊女・蟹娘・蛇女・三足の娘という、実際存在していた過去の見世物の女たちと手を組み、人間の美しい女たちにけちをつけようとする。このパターンは、化物関係の黄表紙の典型的なパターンである。すなわち、田舎に住んでいるそれぞれの化物たちが江戸に来て、人間にけちをつけようとするが、逆に人間に馬鹿にされているばかりであり、最後に江戸文化のない箱根に引っ込んでしまうという、化物尽の決まったパターンを完全に真似している。『怪席料理献立』の冒頭の部分を引用する。

図12 『怪席料理献立』 国立国会図書館蔵



どこい——これは丹波の国の奥山家に生まれたる鬼娘。その昔は人手に渡り、はる——こに見世物となりしは皆様ご存じの通り。その頃は三、四才にてものごゝろも知らぬゆへ、さのみ恥つかしくも思はざりしが、今はたとへのごとく鬼も十八、色心もつきけれども、顔を見ると、皆恐れて近づく者もなければ、いつそぢれつてへの八百も言つて、尚山深く引き込もり、その昔を思いだして悔しがり、何とぞ人間にけちをつけんと、年月心がけしに、同気合集まるやさ女にはこれもいづれも様ご存じの熊女、蟹娘、蛇女、三足の娘などをはじめとして、鬼娘のところへ寄り集まり、べちやくちや——わや——とかしましくも、またすばらしき有様なり  
（『怪席料理献立』一丁ウー二丁オ）

鬼娘の出身地が伯耆から丹波に移ったのは、丹波が化物の出身地として知られているからだと思われる。三、四才の時に見世物にされたのも、事実とは違うが、この設定なら、鬼娘の見世物が十四年前の過去のものとなっており、十八年前の事実と近づいてくる。つまり、作家が本物の鬼娘をかなり意識しながらこの話を書いたと十分想像できる。しかし、鬼娘の容貌が鬼化されたとともに、彼女の行動が、化物の行動そのものとなっている。作家の意図は、鬼娘の事実を際物風に提供するより、面白い化物尽を書くことにあるに違いない。今になっては完全に人間に忘れられた鬼娘が、化物達の依頼を受け、同類の古い者を集めるが、自分たちよりもっと凄い人間と出会うばかりで、結局脅かすつもりが逆に脅かされる結果となり、最後に皆が丹波の山奥に引っ込む結末となる。失敗した見世物の女たちが、化物たちに報告する。「皆面目なくて丹波の国へ引き込みしよしを伝へ聞き、大きに力を落とし、しよせん人間にかなわぬことゝ心をあらため、箱根の先へ隠居して、めでたい春を向かへて」という文で話が終る。見世物の女（＝化物）が人間にかなわない。この終わり方も、化物尽の典型である。

それに、この話では、鬼娘が対決する人間は浄瑠璃『妹背山婦女庭訓』に登

場するお三輪である。元の話では、酒屋の娘お三輪は求女<sup>もとめ</sup>という男が好きだが、彼の方は橘姫という女を追いかけている。嫉妬するお三輪が姫の御殿に迷い込み、そこで意地悪な官女達に侮辱され、逆上する場面がある。『怪席料理献立』（図10）では、鬼娘はちょうどこの場面を覗いている。「しばらく様子を見ているうち、美しい女郎たちが大勢で、お三輪を見つけて、いろ／＼になぶりければ、お三輪は求女に騙されしと思ひ、大きに熱くなり、悪気をまはし、橘姫の指図にてなぶらせると思ひ、大きに怒り、嫉妬の角が生へて、きじやくの相をあらわせば、鬼娘もひつくりし、みんなの逃げたもだうり、しよせんこれではゆくまじひと思案あるべしと、そう／＼に逃げいでける」（『怪席料理献立』（十三丁ウー十四丁オ）。要するに、人間の嫉妬が生み出した「心の鬼」は、化物の鬼娘が持っている鬼らしさより遥かに凄いものであり、結局正真正銘の鬼はこういう類の鬼にはかなわぬというようなことを語っているように思われる。

際物の『古々路の鬼』でも、若い出家を追いかける鬼娘が『道成寺』を連想させるが、こういう嫉妬をする「心の鬼」としての鬼娘はどちらかというと、後期の黄表紙が強調しているテーマだと思われる。その延長線として、山東京伝作の『這奇の見勢物語』を見てみたいと思う。

この作品はそれぞれの過去の見世物をパロディー化したもので、「飛んだ靈宝」と「鬼娘の見世物」が両方登場するが、視点が昔と変わっている。

「飛んだ靈宝の飛び魚の三尊仏も、一心の誠があれば、利益なき事なし。何事も皆一心の誠が大事なり」という文が示すように、形よりも心の方が大事だということである。鬼娘の見世物の絵（図11）では、昔の鬼娘の口上の場面が右上に小さく描かれているが、現代版の鬼娘として、綺麗な女が鬼の真似をしている。彼女の帯が蛇の形となっており、これも『道成寺』を連想させる。「昔から鬼となり蛇となるは皆女なり。男の鬼や蛇になりたるためしなし。されは女の第一慎むべきは、恠気嫉妬なり。女は心の狭き者にて疑ひ深き者ゆへ、わづかの事にて胸に修羅を燃やし、心の鬼が身をせめて、生きなから、やきもち地獄へ落つるなり。恐るべし／＼」（『這奇の見勢物語』（十二丁ウー十三丁オ）。

安永7年当時の黄表紙には、古典的な鬼の話の中に鬼娘を組み込んでいこうとするフィクションの部分と、当時の風俗を伝えようというジャーナリスティックな側面がある。また、鬼娘の容貌をリアルに描こうという傾向も見られる。それに対し、後期の黄表紙は、鬼娘を伝統的な鬼像に戻しながら、『道成寺』や『妹背山婦女庭訓』のお三輪<sup>いもせやまおんなていきん</sup>などのように、女性の嫉妬を強調するようになり、最後に女性の嫉妬としての「心の鬼」を戒めるものとして鬼娘を提供してくれるのである。

#### 注

- ①「化物尽の黄表紙の翻刻と考察（その一）」（アダム・カバット、武蔵大学人文学会雑誌第28巻第1号、平成8年9月）参照。
- ②『半日閑話』（大田南畝『日本随筆大成』8巻、吉川弘文館、昭和50年、353頁）
- ③『宴遊日記』（柳沢信鴻『日本庶民文化資料集成』第13巻、三一書房、昭和52年、352頁）
- ④朝倉無声によると、本物の鬼娘は橋の東の方ではなく、西の方となっているが、その証拠は書いていない。（『見世物研究』春陽堂、昭和3年、151頁）。
- ⑤『鳩溪遺事』（『近世人物夜話』森銑三著、東京美術、昭和43年、66頁）
- ⑥『武江年表』（斉藤幸成編『江戸叢書巻の13』江戸叢書刊行会、大正6年、165-166頁）
- ⑦『俗耳鼓吹』（大田南畝『燕石十種 第3巻』中央公論社、昭和54年、152頁）
- ⑧「伯耆か国たいせんのふもとなる楚満人伝右衛門と云者ある時山中にて鬼の如きもの出て伝右衛門つかみかゝるをまんまとしてとめたり然にこのほうれい伝右衛門か妻のはらにやとつて鬼の顔のやうなむすめをうみ山師がかひニ来てうつつてやり両国ニミセものニ出し事」『稗史鈔』蜂屋椎園（『黄表紙総覧前編』棚橋正博著、青裳書店、昭和61年、152-153頁参照）。これが現在存在していない黄表紙『評判鬼娘』についての記録だが、やはりこの記述にも鬼娘が伯耆の国の人間から生まれてきたものとなっている。話自体には、『鬼娘伝』や『古々路の鬼』と共通している部分が多い。
- ⑨安永6年刊の黄表紙『三宝利生初竹』（米山鼎峨作・鳥居清経画）の中で、「飛んだ靈宝」の絵があり、これが『鬼の趣向草』の絵と似ている。「飛んだ靈宝」の見世物は安永6年にもあったらしい。
- ⑩『鬼娘伝』の中で、「西瓜の裁売は。蓮の台の形をなし真桑瓜は。如意宝珠の佛あり」と書いてある。また、「まくわふりぬすんでじゆ者にしかられる」（評万句合 天四礼2）という川柳がある。